

大学の図書館

第42巻第1号 (No.590)

2023 1



目次

見る前に跳ぶ	呑海 沙織 ...	1
特集：大学図書館研究会とわたくし		
大図研と、わたくし：自己紹介にかえて	石崎 睦 ...	2
学べる場所と、たくさんの仲間	牛島 千穂 ...	3
大図研と、わたくし	小林 明博 ...	4
コレクション構築の主体性について	嶋田 学 ...	6
大図研と、わたくし	鈴木 学 ...	7
大図研と私	諏訪 有香 ...	8
大図研とワタクシ	高瀬 洋子 ...	9
大図研とわたくし	千葉まこと ...	10
元(?)ユーレイ会員の私と大図研	徳田 恵里 ...	11
大図研のすゝめ	中川恵理子 ...	12
大学図書館研究会とわたくし	山下 大輔 ...	13
大図研とわたくし	若狭 あや ...	15

見る前に跳ぶ

呑海 沙織

2011年の全国大会で委員長を拝命してから、大図研の委員長／会長として12年が経とうとしています。年頭にあたり、本号の特集「大学図書館研究会とわたくし」に因んで、ふりかえってみようと思います。

はじめに打診をいただいたとき、いろんな疑問が頭の中で渦巻きました。「他に適任者がいらっしゃるのに、なぜ私に」「経験が浅いのに務まるのだろうか」「委員長って何をするんだろう」と。折しも、十数年勤めた京都大学を辞職し、筑波大学でテニュアトラック助教として着任した頃のことでした。十分な研究成果がなければ職を失うという厳しい状況下で、本業以外に割く時間はないはずです。

いろんな意味で、「私に務まるのか」と何度も自問しました。しかし、どんなに考えても答えはできません。そこで、考えるのをやめ、前向きなお返事をするにしました。お声がけくださったというその事実を素直に受け止めよう

と思ったからです。自分の内に答えがなければ、外に求めればよいと。

ふりかえって今、あの時、決心してよかったと心から思います。合意形成や組織運営等について、自由度の高い組織であるからこそ体験できたことがたくさんあるからです。とりわけ、多様なバックグラウンドをもつメンバーと一緒に、チームとして考えを形にしていくことの喜びは何ものにも代え難く、モチベーションの維持につながっています。そして、ここで積んだ経験は思いがけずしばしば、本業への予行練習となっています。

「見る前に跳ぶ」ことは往々にして、不安や恐怖を伴います。しかし、意外に簡単なことでもあります。目を瞑ってとべばよいのですから。失敗したとしても、次につながればよいのですから。そして、考えても答えがでないことをどれだけ考えても答えはでないのですから。

ただ今、見る前に跳ぶ人、募集中です。

(どんかい・さおり／

筑波大学図書館情報メディア系)

特集：大学図書館研究会とわたくし

明けましておめでとうございます。と申しても、松はとうの昔に取れてしまっておりまして、刊行タイミングの都合で、毎年このような間抜けな状況になりまして相済みません。

さて、大学図書館研究会報『大学の図書館』2023年の封切りは、グループ各位のご協力を得まして、「大学図書館研究会とわたくし」というテーマで、以下の条件をなるべく満たすことをお願いいたしました。

1. 大図研的に中堅どころの方。入会3年目以降目安。いなければ30代-40代
2. なるべく今まで会報に書いていない方
3. 仕上がり1ページを目安
4. 大学図書館研究会に対する思い、なければ何でもよし（をい）

編集子としては、項番2を重視してみたのですが、どんなものでしょうか。

掲載順は、潔く？、責任表示の五十音順です。

本年も、皆さまにとって、よい1年でありますよう、編集子のみならず、常任委員全員で祈念しております。

（担当：会報編集委員会・上村順一）

大図研と、わたくし： 自己紹介にかえて

石崎 睦

1. はじめに

はじめまして、北海道大学附属図書館／北海道地域グループ所属の石崎と申します。

はじめてお目にかかる方がほとんどだと思います。それもそのはず。実を言うと私は、大学図書館研究会（以下「大図研」と略記）に入会してまだ半年と少ししか経っていない「新米会員」であり、さらには大学図書館で働き始めてわずか1年9か月ほどという「新米図書館職員」なのです。そんな私が「大図研と、わたくし」というテーマで執筆するのはとても恐れ多いのですが、今回は新入会員としてのご挨拶も兼ねて、私自身のことと大図研への想いを綴っていただけたいと思います。どうぞよろしくお付き合いください。

2. わたしのこと

まずは、私がなぜ図書館職員を志したかということからお話ししましょう。そのきっかけは、自身の学生時代にあります。歴史学専攻の学生として図書館を文字通り使い倒す日々を送り、さらには図書館でのアルバイトやボランティア活動も行っていた私は、今度は「図書館の中の人」として教育・研究活動の支援に携わってみたいと思い、図書館職員を目指すようになりました。

2021年4月に北海道大学附属図書館へ入職して以降は、利用支援課本館閲覧担当へ配属となり、現在まで閲覧業務に従事しています。1年目であった昨年度は慣れない環境下で毎日ヒューヒュー言っていました。2年目の今年度からは新たに任せいただける業務も増え、忙しくも実りの多い毎日を過ごしているところです。

3. 大図研に入会したきっかけ

さて、そんな私がなぜ大図研に入会するに至ったのか。次にそのきっかけと経緯についてお話ししたいと思います。

私が大図研へ入会する直接のきっかけとなったのは、2022年2月にオンラインで開催された関東地域グループの合同例会「大学を飛び出した人たち」への参加でした。当時今後のキャリアについてぼんやりと考え始めていたところ、たまたま例会開催のお知らせを発見し、「これだ!」と思ったのです。

大図研のイベント参加がそもそも初めてだったこともあり、当日はおっかなびっくりで臨んだのですが、例会は終始和やかな雰囲気が進み、とても充実した時間を過ごすことができました。何より、諸先輩方のこれまでの経験や学びを伺うことは、自分の目の前にも多様な選択肢や可能性が広がっていることを実感させてくれるものであり、それと同時に「もっとたくさんの人の話を聴いてみたい」と思わせてくれる時間でもありました。コロナ禍での就職により、どうしても所属を超えたつながりが作りにくくなっているなかで、例会のタイトルよろしく、まずは「(所属している)大学(だけの輪)を飛び出し(てみ)た(い)、そして大図研でもっといろいろな知見を得たい」。そう感じた私は、事後アンケートで早速入会の意思を伝え、晴れて大図研の一員となったのです。

4. おわりに：今後の抱負と期待を少しだけ

こうして大図研の一員となったわけですが、そうかと言って入会後に何か具体的な活動ができていなくても、せっかくの入会時の野心(?)も燃り続けている、というのが正直なところでは。

しかし最近では、本誌2022年4月号(特集:情報技術の学び方)に触発されてプログラミング言語の勉強を始めた、図書館を巡る変化や動向を学ぶべくいろいろなセミナーに参

加してみたり…と、ようやく小さな一歩を踏み出せるようになってきました。振り返ってみると、こうした小さな行動も、大図研を通じて触れている会員の方々の多様な取り組みや考えに触発された部分が大きく、それらは図書館職員として働く上で私自身の大きな刺激とモチベーションにもなっていると感じています。今後もこうした学びを続けながら、所属地域グループ内外での交流を深めていきたい。そうして、自分の「やってみたい」や「もっと知りたい」と思えることを、大図研を通じて見つけていきたい。そんな想いと期待を抱きながら、今後も大図研の一員として過ごしていきたいと考えています。

長々と失礼しました。それでは今後ともどうぞよろしく願いいたします。

(いしざき・むつみ/北海道地域グループ・
北海道大学附属図書館)

学べる場所と、たくさんの仲間

牛島 千穂

「大図研は、アクティブワークの場です。」何年か前の全国大会で、呑海会長のおっしゃっていたこの言葉が、“大図研とわたくし”の、まず1つめのカギであるように思えます。

大図研に入会したきっかけは、“非常勤のままでは、参加できない研修がある”ということを知ったからでした。

当時、大学図書館で非常勤職員として働いていた私は、とある図書系協会の海外研修にとっても興味を持ちました。参加資格には明確に「常勤職員」とあるのを確認した上で、いつも柔軟に話を聞いてくださる上長に相談したところ、得られたこたえは「非常勤は参加できない」というものでした。それは、納得のいくこたえでしたが、常勤と非常勤には、

学べる場のういで違いがあるのだ…ということを実感した瞬間でもありました。

それなら、非常勤のいま、何かできることはないのか…いまのままでは得られないものを得るためにはどうしたら、と考えて入会したのが大図研でした。

実際には、研修だけではなく、いろいろな講演、“現場のいまの声”といったさまざまな情報が飛び交っていたことで、とても良い自己研鑽の場なのだ気が付きました。時々届くメールを眺め、会報に目を通していただけ、旬の話題、現場の悩みや思い、図書館界の動きなどなどが、肩ひじ張らないかたちで入ってきます。私に合った学びの場であるように感じました。

入会してから数年後、勧められて委員を務めることとしました。委員の立場で得られたものは、組織はどうやって動くのか？意見を示すときはどういう手順を踏むか？という、大きな視点でした。大学や図書館、はたまた企業などでも、社会で働いていくことは多くの場合、組織内の一部として働きます。そこで必ず役に立つ、いまも、おそらくこれからもとても重要な考え方を、委員の立場から学びました。

一方では、失敗も積みました。議事録が作れない、意見を手を挙げておいて最後まで遂行できない、などなどなど…。いろんな方にたくさんのご迷惑をおかけしてしまいました。本当に申し訳ない限りです。ですが、失敗を指摘してもらえ、申し訳ながっているだけでなく、ここから学べばいいのだと思える。そういう空気のかな、身をもって貴重な経験を積むことができたと思います。

どんな立場でも、ひとりでも、学び続けられる。それが、私にとっての大図研です。

そして、実際には、ひとりではないことも知りました。それが、もう一つのカギである、「仲間がいること」でした。

名刺交換やメールのやりとりをきっかけ

に、まさに北から南まで、全国にたくさんの知り合いができました。ふとお声をかけた方が、館長だったり、教授だったり。メールでやり取りをした方が、遠く離れた地の方だったり。普通に仕事をしていただけではきつとつながらなかった方たちが、私の名刺フォルダにはたくさんいます。

そして、大図研ではない場でも、どなたかの所属大学名を見るだけで、ああ〇〇さんの大学だ、と思ったり、論文などを見かけては、□□さんの研究か、と読むこともあります。前向きに明るい気分で、知識や情報を得る良いきっかけになっています。そして何より、いつも心に力をくれています。

みずから進んで行動すれば（もしくは行動してなくても）、得られるものがたくさんあること。もし失敗をしても大丈夫ということ。そして、全国にたくさんの仲間がいること。

これが、私にとっての大図研だと思います。これからもお世話になっていきつつ、そろそろ、私にも還せるものがあつたらいいな、と思うこのごろです。

(うしじま・ちほ／千葉地域グループ)

大図研と、わたくし

小林 明博

私が大図研へ入会したのは約4年前の、2018年の10月である。この半世紀以上の伝統ある研究会の会員としては若輩者であり、今でも各研究テーマで議論される内容にはなかなかついてゆけない感がある。とはいえ大学図書館の職員としての職歴は30年以上にもなり、これまで何をしてきたのだろうと後悔も残る。入会する際は、コロナ禍前であったため、対面での例会に時々参加し、機関誌「大学の図書館」掲載の情報を参考にできさえできればよいと思っていたが、直ぐにコロ

ナ禍による影響ではほぼオンラインのみの集会成为となり、地域グループでの交流も限定的となり少し残念な気分が続いている。ただ、各地の大学図書館にも長期にわたり変革を迫られる結果となったコロナ禍の影響は、教育DX、電子資料のオープンアクセス化、非来館の図書館サービスを急速に進めざるを得ない状況となり、オンラインでの交流会や各地域グループからの招待により研究会の行事に参加することで、各大学の状況やサービスの取り組みなど本学図書館にとってもたいへん参考になる情報をいただき、随分たすかった。また、全国大会もオンラインでこの3年は行われたことで参加し易くなり、参加者数も増加したとのことを聞き、全国の会員とも知り合えたことが何よりうれしく感じる。今後はぜひオンラインでの活動を残しつつゼヒリアルでの活動も漸進的に復活したらよいなと思う。

私が大学の図書館員として配属されたのは1990年代の初めである。当時は教育研究支援機関として大学の中でも中心的な位置づけであり、職員も司書の専門的技能が重宝されていた良き時代であったと認識している。目録規則に準拠した手書きの目録カードの作成や学生がカウンターで提示する貸出証に手書きで記録していた時代である。図書館配属になると同時に先輩から図書館界の現況を知るために日図協と日図研には入会し、機関誌は読んでおくと良いといわれ、入会したが、大図研については機関誌の「大学の図書館」を読める環境にあったため入会までは考えなかった。進行性の視覚障害の疾患のため、7～8年ぐらい前から活字が読めず、一時図書館業務を辞することも考えた時に外部の図書館関連団体を全て退会したが、大学の配慮もあり業務を続けながら音声パソコンの利用訓練に2年間通い現在も図書館にて業務を継続させていただいている。視覚障害の不安をかかえつつ日図協、日図研に再入会すると共に

大図研にも初めて入会し、他の大学図書館の職員の方の中で対等な議論に参加できるかどうかを試したいとも思い、大阪地域グループの例会など活動にポジティブに参加しようと考えた。おそらくみなさんは最初に対応に戸惑われたのではと思っているが、特に役員メンバーには配慮や助けてもらい普通に接していただきただただ感謝である。機関誌「大学の図書館」を購読するのに際し、電子版またはテキストデータ版での提供がなかったことについて、前例がなかったのかと疑問であったが、即時にご対応いただいた。今では基本的に個人会員には電子版のみの提供になってよかったと思っている。

これからの大学図書館として、大学の中での復権を目指し、研究データ等の電子リソースのOA化や管理、非来館型サービスの充実に伴う「場（空間）」としての図書館活用法の創出、そしてマイノリティな利用者も含めたあらゆる利用者へ同様な資料の提供とサービスができる人材の育成と配置など新たな課題や大学図書館のSDGsの具現化などに向けて協力できればと思っている。会員の減少が進み、特に若い職員の入会が深刻な問題のようで、機関誌、ホームページ、SNSなどで募集の広報を積極的に行っているようであるが、非正規職員の厳しい雇用待遇による会費納入や職員の他部署への配転などによりますます入会を躊躇する若い図書館員が増えていると思う。会員の減少をくい止め、未来永劫研究会が繁栄できるよう少しでもお手伝いできればと思っている。

(こばやし・あきひろ)

大阪地域グループ・阪南大学)

コレクション構築の 主体性について

嶋田 学

公共図書館に32年間勤務した後、縁あって大学の司書課程で教員をすることになった。現在の勤務校、そして最初に勤務した大学でも、図書館関連科目の担当者ということで、図書館運営についての会議体（委員会）に所属させて頂いた。

最も関心をもったのは、大学図書館のコレクションがどのように選定、構築されているかという事であった。初任地の大学は2学部6学科の学生数が約3千人の規模、そして現在の勤務校は、9学部15学科（2023年度予定）で新学部の定員が充足されると学生数が7千人を超えるいずれも私立大学である。

国立大学をはじめ、大規模大学についてはまた事情が異なるかもしれないが、学生数1万人前後の大学図書館をいくつか視察させて頂いてお話しを伺ったところによると、大学図書館の選書方法は概ね同じような方法をとっているのではないかと感じた。つまり、学部学科ごとに予算が割り振られていて、それぞれの専門領域の教育と研究に資する図書、雑誌、電子ジャーナル等のオンライン情報資源を選定、購入しているということである。

雑誌やオンライン情報資源については、選定タイトルを継続的に購入、契約するとして、年次ごとに逐次選定が行われているのは図書資料である。

私が経験した大学はいずれも学科ごとの予算枠と、「共通予算」枠として図書館所管課が選書する予算枠が設けられていた。しかし、この「共通予算」枠はいずれの大学でもそれほど大きな予算枠ではなかった。

教員は、基本的に研究に資する図書は個人研究費等で調達し、図書館に所蔵すべき図書は、自身が担当する専門科目教育や学生自身

が学習に役立てる事のできる関連図書を選定しているはずである。しかし、教員の専門領域はいずれも先鋭化される傾向にあり、学部という枠で俯瞰した基本図書がスケモレなく選定されているのかについては判然としにくい。いわんや、いわゆる共通教育全般について初学者向けの基本図書を設置学部の傾向も踏まえつつ、バランスよく選書し、蔵書を構築するという選書体制は見当たらない。これは、勤務校のみならず、視察で訪れたいずれの大学においても同様の事が言える。

いずれの大学図書館においても、パブリックサービス部門は、そして大学によっては図書館運営業務全体が専門事業者に受託されている。仕様書と契約書に基づき、そしてそれぞれの学科ごとの、あるいは大学図書館としての資料選定基準等に基づき、蔵書は構築されているものと思う。しかしこの場合に、大学図書館としての選書や蔵書構築における主体性ということはどうに考えられているのであろうか。

サービス対象である多様な住民に向けて、自治体特性や住民ニーズに基づいて蔵書の全体最適を志向する公共図書館とは異なり、各学科の専門教育に必要な資料を、各教員がそれぞれの価値観で選定した大学図書館のコレクションは、俯瞰的な視点では構築されていない。公共図書館のように、予め目指すコレクション像に向けて「構築されるコレクション」ではなく、それぞれの学科が、かかる教育目的に沿って有益な資料を選定した「部分最適」の集積としての「結果としてのコレクション」と言えるかも知れない。

しかし、そのように考えると、各学部単位で、あるいは大学図書館全体のコレクション像として、大学のミッションに合致する情報資源群を俯瞰し、個別具体にでも評価する視点と仕組みは求められるであろう。図書館運営を委託できても、コレクション評価までは外部化出来ないと考えれば、大学当局

には、ネットワーク情報資源も含めた図書館資源のあり方について、全学的な議論の枠組みを検討頂きたいと感じる。

(しまだ・まなぶ/京都橘大学)

大図研と、わたくし

鈴木 学

■私の大図研活動史

私は大学図書館問題研究会（当時）に2013年6月に入会いたしました。入会歴は10年になります。加入の主な目的は「大学の図書館」の購読でした。今の大学図書館の状況を会誌によって把握することができると思ったからです。ですので、当時なにか活動に参加しようとは、実は思っていなかったのです。

私の大学図書館問題研究会の活動初体験は、2014年6月21日に関東五支部合同例会として開催された「東京海洋大学（品川）附属図書館見学会」でした。この頃は、私の勤務する日本女子大学図書館の新館の話が出始めた時期でした。他の図書館で新築や改築にどのように取り組んでいるのかを掴んでおきたいと、そのような大学の知り合いに片っ端から見学のお願いをしていたのです。そのとき東京海洋大学に勤務していたのが知り合いの上村順一さんでした。未入会の知り合いの図書館員2名も誘って見学会に参加、あとの懇親会にも3名で出席しました。お開きとなってその帰り道、その未入会の2名も懇親会の場で入会したと話していました。

■図書館員の研究活動の意味

日本女子大学図書館に勤務して、2023年度で33年目を迎えます。職について3年目に、私立大学図書館協会東地区部会研究部の下にあった分類研究分科会に参加しました。基本方針は「件名、シソーラス、Indexing理論

等を含んだ“トータル”な意味での図書館分類法とその理論に関する研究」でした。そのまま継続して2017年まで在籍しています。私の研究テーマと興味関心は、そのまま整理技術に向かっています。分類理論や目録理論に対する理解は現在の業務にも直結しています。

研究分科会では、図書館員が自主的に課題設定をして参加者全員で取り組んでいました。分類以外にも、目録、視聴覚、レファレンス、逐次刊行物などテーマに沿った研究分科会が15程度活動していました。研究分科会は2年度の活動期限でそれぞれ15～35名程度の参加会員がいて、毎月の月例会を開催し研究活動をしていました。夏には合宿を行っていたところもありました。さらに、30年前といえば図書館システムの導入が始まった頃でもあり、情報交換として機能していた面もありました。システム化に伴い図書館の業務形態も変わっていった時期でもあり、参加者の所属機関の見学では質問が飛び交っていたのを思い出します。

分類研究分科会に参加して思ったことは、現場の実務者の視点として、司書課程の教科書とは別の視点を持つことの大切さでした。教科書に書かれていないことや、教科書の内容以上の知識が必要となることもありました。

また、図書館の「キモ」は人である、ということでした。ザックリといえば良い図書館員は素晴らしいリソースであり、情報案内人にもなります。分科会の参加者にはそういう類いの人がよくいることを実感しました。図書館員が自主的に課題設定をして参加者全員で取り組んできた分科会活動の効果であると思われま。ちなみに、現在活動している研究分科会は1つです。

■大学図書館員が研究もできるコミュニティーとなるか

私が勤務する大学のみならず、私立大学では大学図書館員の役割が自己研鑽よりも業務管理を求める傾向を強く感じています。自ら課題を見つけて取り組んでいく時間を確保できなくなってきました。特に図書館員同士が集まって研究するような機会は殆どないと思われまます。

2021年に大図研の正式名称が変更され、その思想も再確認されました。そこで大図研の指向性を示していたこと、さらには大図研HPの「大学図書館研究会の概要」にあるように、大学図書館員の研究コミュニティとして、大図研には「最後の砦」となる可能性を感じています。

(すずき・まなぶ／日本女子大学図書館)

大図研と私

諏訪 有香

この度、畏れ多くも大図研の会報『大学の図書館』に寄稿する機会をいただきました。頼まれたら断れない、優柔不断が服を着て歩いているような私。二つ返事で引き受けました。締切間近になっても、何を書いたらいいのかわからず、後悔するのはいつものこと。気軽に書いてかまわないとの言葉を信じて、大図研に入会してからのあれこれを書いてみたいと思います。

入会のきっかけは、図書館業務に長年携わってきた上司の退職により、自分自身の業務範囲が広がったこと、新たに図書館に配属になった臨時職員や上司に図書館業務のイロハをレクチャーする立場になったことが挙げられます。そのうえ、システムのリプレイスや大学設置準備に関連した書類作成等、業務が豪雨の様に降り注ぎました。大学図書館に相応しい設備とは何か？短期大学図書館との差別化はどうする？自分の経験や知識だけで

はどうにも太刀打ちできなくなり、途方に暮れていました。

その時思い出したのが、かつて参加した図書館研修で耳にした「大図研」の存在です。参加者が、楽しそうに、でも真剣に口にしていた「大図研」の活動内容は、その時の私には、砂漠で見つけた清水のように魅力的でした。大図研に入会すれば、全国の大学図書館員の皆様と関わり、多くの情報をいただくことができるのではないかと思います、入会しました。

現在広島地域グループでお世話になっています。この地域グループ研究会、コロナ前は広島市内で行われており、四国山脈と瀬戸内海を越えて参加するのはためらわれていたのですが、オンラインで開催されるようになって、そのハードルがぐっと下がりました。扱う内容が選書や紀要編集、著作権など、日常業務での「困った」ものばかりなので、本当に勉強になります。雰囲気もとても穏やかで、私が頓珍漢な質問をしても、ちゃんと受け止めてくださる、その懐の深さに感動すら覚えています。

また、メーリングリストによって、他の地域グループの研究会を知り、参加することも助かっています。日常業務で発生する、些細な、しかし解決しておきたい困りごとを気軽に相談できる点も魅力でしょう。大学図書館員だけでなく、様々な立場の方からの情報も得るものが多くて、本当に入会してよかったと思っています。

月に一度の会報では大学図書館員の方々の取組を拝見して、刺激を受けています。わかった気になっているけれど全くわかっていなかったことの多さに気づくことがあります。学ぼうと思えばいくらでも学べる。そんな素晴らしさが大図研にはあると思います。

全国大会には過去2回ほど参加しました。研究発表や記念講演が世界を広げてくれたのはもちろんですが、分科会では普段窺い知る

ことのできない他館の事例報告や、司書としての気概を拝見し、日常業務に生かせるヒントを得ました。SNSやブログ等でお名前を拝見するだけだった方とも、オンラインではありますが交流することができて、大図研の組織の大きさ、ありがたさを実感しています。

個人的に残念なのは大図研会員の皆様に対面でお会いして直接コミュニケーションをとっていないことです。コロナ禍により、オンラインの便利さに慣れてしまいましたが、やはり実際に話をする事の素晴らしさも忘れてはいけません。いつかまた、対面で全国大会や研究会が行われる日が来ることを願っています。

今まで大図研から得るものが圧倒的に多かったのですが、今後は、この会で得たご縁を大切にしながら、自分にも何かお手伝いできることがあればと思っています。これからどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(すわ・ゆか／広島地域グループ・

高知学園大学・高知学園短期大学図書館)

大図研とワタクシ

高瀬 洋子

私は、2019年春に大図研に入会をしました。それまでも大図研の名前は知っていましたが、当時の私にとっては、気になりつつも…大学図書館員として積極的に活動をしている方々の熱意に私がついていけるのだろうかという尻込みと敷居の高さを感じ、入会するには至っていませんでした。

その後、大図研に入会をした2019年春は私にとって新たなスタートとなる年でした。それまで勤務していた大学を退職し、新たに大学図書館に勤務することとなったのですが、前職では高等教育開発や情報システムに関する部署に所属しており、大学図書館の現

場から数年離れていたため、大学図書館業務に関する知識や情報のアップデートができていたのだろうかかと不安を持っていました。楽しみと不安が入り混じっていた新たなスタートに対して、大学図書館に関する情報をえるためにどうした良いかと考え、自分の中で「他大学図書館の職員と交流出来る場に参加する」、「図書館に関係するイベントになるべく多く参加する」という2つの目標を立てることにしました。しかし、非正規職員である私にとっては、「他大学図書館の職員と交流出来る場に参加する」というのは業務上なかなか難しく、どこかにこうした機会を得られる場所はないだろうかと探していた際に、再び大図研に出会いました。最初に持った気持ちというのは非常にしぶとく、再び出会った大図研にもやはり敷居の高さを感じてしまったのですが、新たなスタートという気持ちに背中を押され入会することにしました。入会をしてすぐ、現在も所属している東京地域グループの運営委員の方から、運営委員のお誘いを受けた際は非常に驚きましたが、これも新たなスタートだという思いから承諾をしました。

東京地域グループの運営委員には、ほぼ勢いで参加を決めた私ですが、実際に運営委員会に参加し、皆さんの人脈の広さと知識の豊富さに驚きました。初めて運営委員会に参加した際は、そのすごさに圧倒され気がつけば運営委員会が終わったことを今でも覚えています。まず、皆さんの話に出てくる人がわからない…次に出てくるお話を聞いたことはあるけれど…内容がよくわからない。皆さん、す、すごい!!!となり、初めての運営委員会は、必死に出てきた単語やお名前やご所属をメモし、頭をパンパンにして帰りました。今でも、日々新しい情報が入っている状態ではありますが、初回の自分の無知を痛感した衝撃はとても大きく、自身の視野の狭さを実感し大海を知る良いきっかけになったと思っ

ています。そんな運営委員会では、毎月皆さんと話す近況を含めた雑談なども私取っては貴重な情報となることが多く、他館との情報交換を行いながら自分の関心のあるテーマについても発言できる機会を持てる貴重な機会だと感じています。また全国大会のお手伝いをさせていただいた際は、更に全国の大学図書館の方々と交流する機会ももて、あの時に運営委員にお誘いいただいたことも勢いで委員となったことも、とてもラッキーだったなと感じています。(もし現在、地域グループの運営委員や全国大会の実行委員について参加を迷っている方がいましたら是非参加をすることをオススメします！)

また、運営委員としての活動やMLでの会員同士の意見交換や情報を見ることによって、自館の状況について振り返り曖昧な規則や運用の見直しのきっかけとなることもあり、大図研で得た情報を職場にも少しは還元できているのではないかと感じています。

こうした、大図研を通じた様々な経験を考えると、昔の自分に「なぜ入会を尻込みしていたの！もっと早く入会しておけば良かったのに！」と悔やむこともあります。今後の活動の中でより多くのことを吸収し、自身の成長や自館に還元できればと思います。会員の皆様、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

(たかせ・ようこ/東京地域グループ)

大図研とわたくし

千葉 まこと

大図研に対する思いを書いて欲しいとのご依頼を受け、自身の異動と大図研との関わりについて振り返ってみました。1998年に新卒採用で大学図書館に入職し、数年後に大図研に入会しました。夏の全国大会に初めて参加した際、大会委員の方がウェルカムガイダンスを実施してくださり、初心者でも温かく迎えてくださいました。その時に「職場は違えど同業者。抱えてる問題や悩みは同じだから遠慮せずに質問したり助けを求めたりしていい。知らないことは恥じゃないから恐れずに発言してね」と言ってもらえたことを今でも覚えています。あれから20年以上経ちましたが、大図研を通して多くの方と知り合い、様々な場面で助けて頂きました。

2006年、薬学部が4年制から6年制に移行した年に、図書館から学部事務(学事・教務)へ異動することになりました。一時は大図研を退会することも考えましたが「数年後に図書館に戻るだろうから、情報だけは仕入れておこう」と思い、幽霊会員(?)として居残り続けることにしました。すると、『大学の図書館』やメーリングリストで発信される情報は教務課での業務内容に直接的・間接的に参考になることが多く、アクティブ・ラーニングの導入支援に関する図書館の取り組み紹介など、大変貴重な情報源となりました。図書館業務が大学教育を下支えしていることを実感した経験でした。その後、2012年にもう一つの学部事務課に異動し、合計16年ほど教務系部署に在籍しました。

2021年に、現在の所属である教学IR研究推進課に異動しました。この部署は2名のURAを擁し、教学マネジメント、IR業務、産学官連携、知財管理、研究支援、高大連携事業など幅広い業務を扱っています。特に、オープンサイエンス時代の研究支援の一環と

して研究データの管理・利活用が求められており、研究データポリシーの策定や、研究データマネジメントを支える学内の体制構築など、図書館業務とも密接に関わる課題も多くあります。ここで気が付いた方もいらっしゃると思いますが、『大学の図書館』の11月号の特集は「研究データ管理」でした。さらに5月号の特集は「高大連携」でした。私自身は図書館とは直接関係ない業務に携わっているのですが、またしても『大学の図書館』に助けられました。編集委員の皆様が、図書館を通して大学が抱える課題に資する紙面作りをされていること、そして大学の教育・研究・社会貢献に図書館機能が貢献していることのあらわれではないかと思えます。

昨年より図書館課も兼務しており（名ばかりですが…）、久しぶりに全国大会に参加させて頂きました。勉強不足で周回遅れのため皆様の議論になかなかついていけず、分科会で見当違いな質問をしてしまったのですが、参加者の皆様がフォローしてくださった、ということがありました。20年前のウェルカムガイダンスで先輩方に言われた「知らないことは恥じゃないから恐れずに発言してね」という言葉を思い出しました。様々なバックグラウンドを持った方が、誰でも安心して参加でき、受け入れられるところが大図研の良さなのかなと再認識しました。

なお、分科会で他大学図書館の方の先進的な事例発表などを伺っていると、自館と比較してしまい、大学図書館間のサービスの質の格差を感じずにはいられませんでした。予算規模や設備の差に加え、人的リソースの差も大きく、学生や教員が大学図書館で享受するサービスがこれほど違って良いのだろうか、と少し不安にもなりました。オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方が検討される中、求める人材像も専門化、高度化しています。少人数での高度な運営が求められる中、大図研での研修や情報提供がますます

重要なものになっていくと感じています。

最後になりますが、大学図書館研究会を運営してくださっている委員の皆様がこの場を借りて御礼申し上げます。

（ちば・まこと／

東京地域グループ・東京薬科大学）

元(?)ユーレイ会員の私と大図研

徳田 恵里

初めて大図研のイベントに参加したのは、2015年春に兵庫地域グループ（当時は兵庫支部）が開催したイチゴ狩りでした。別の団体の研究会で知り合った方が兵庫に所属されていて、非会員も参加できる懇親企画だからとお声がけいただきました。

そのころ私は専門図書館から大学図書館に仕事を変えて3年ほど経っていましたが、「そういえば職場以外で大学図書館の人ってほとんど会ったことないな」と思い、好奇心から参加したことを覚えています。幸い他にも非会員で参加されている方もあり、兵庫地域グループの皆様にも温かく受け入れてもらえました。

それがきっかけで、という訳でもないのですが、その次の2015/2016年度より正式に大図研に入会、兵庫地域グループに所属することになりました。

始めのころは比較的熱心に活動に参加しており、別の団体から講座を依頼された時は、人前で話をする練習の場として、地域グループの例会を活用させていただいたりもしました。

しかし他団体での役員就任や土曜日出勤、体調不良などで例会や編集作業の時間を取ることが難しくなると、何となく色々と億劫になり、会報の内容もよく理解できず積読にし、例会でも気後れし…と大図研の活動自

体に付いていけない気分になり、いつしか徐々にユーレイ会員になっていきました。

そんな私にとって転機となったのは、2019年に神戸で開催された第50回全国大会でした。全国大会は初参加でしたが、地元なので交通費の負担も少なく、職場に休暇を申請する必要もなく、ありがたい限りでした。この時も諸事情により実行委員に加わっておらず、本当は地域グループのメンバーに対して後ろめたい気持ちが強かったのですが…。

参加した分科会は第4分科会「出版・流通」と第8分科会「学術情報基盤」でした。特に第8分科会は“CAT2020がやってくる”というタイトルで会場は満員御礼、一つのPCを2人・3人で覗き込みながら話を聞くような状態で、会場は熱気に溢れていました。目前に控えていたCAT2020というテーマの前に、様々な立場の人が一丸となって学んでいる姿は斬新で、感慨深いものがありました。地元開催なので非会員の同僚に参加して貰えたことも、良かったなと思っています。その後の全国大会はオンライン開催になったため、毎回参加できる部分はアクセスするようにしています。オンライン開催については賛否両論あると思いますが、遠方に出かけずに参加できるという点はとてもありがたく感じています。私がユーレイ会員から脱却できた一つの理由が、この「全国大会のオンライン開催」にあったことは否めません。

こんな私ですが、ある程度時間にゆとりを持てるようになったため、思うところがあり今年度から全国委員になりました。そちらの経緯は会報2022年11月号の巻頭言で書いておりますので、よろしければご笑覧ください。

大図研のような組織は基本自主学习・自己研鑽のための団体です。かわり方もスタンスも人それぞれだと思います。アクティブに活動していた人が、事情によりしばらく活動できなくなることもあるでしょう。ただ、ユーレイ会員とアクティブ会員両方をやってみた

感想は、自主的に学ぶ団体は、事情が許すなら、アクティブに関わった方が絶対面白いということです。積極的に関わることで、自分と同じ興味関心のある人に出会える可能性も高まります。また、大図研は全国的な組織ですので、勤務先の規模や雇用形態から生ずる情報格差を埋めるための一助にもなります。私自身、CAT2020に関する情報収集はほとんど大図研を通じて行っていたと言っても過言ではありません。

長年ユーレイ会員をしておりましたので、自身が中堅という意識はほとんどなく、これから新しい活動を始めるような気持ちです。状況が許す限り、今後はアクティブに活動に関わっていきたいと思います。

(とくだ・えり／兵庫地域グループ・

株式会社紀伊國屋書店)

大図研のすゝめ

中川 恵理子

私が大学図書館研究会に入会した理由は、学内でただ一人の司書として、大学図書館についてもっと勉強したいと思ったのがきっかけでした。公共図書館出身の私にとって、大学図書館は、サービスや勝手が違う部分も多く、他大学はどうしているのか、一体今どんなサービスが利用者には求められているのか、分からないことや知らないことが多くあると日々感じていました。大学図書館について、もっと勉強し、同じような悩みを抱えている図書館員たちと交流を持つことはできないかと考え、インターネットを検索していたところ、大図研のホームページを見つけました。これが私と大図研との運命(?)の出会いです。

私が大図研に入り、初めて出た全国大会は広島大会です。知り合いが誰もいない中で、

全国大会に参加するのは不安もあったのですが、ウェルカムガイダンスで研究会についての説明を受け、分からないことも丁寧に回答してもらったおかげで、安心して参加することができました。全国大会中は、一人で参加する私に、分科会や交流会などの様々な場所で、会員のみなさんが親切に声をかけてくれたことが嬉しくて、温かい研究会だなと思ったことを覚えています。基調講演や分科会も勉強になりましたが、分科会参加者と広島焼きを食べに行ったり、地酒の会で経験豊富な大学図書館の先輩から色々な話を聞いたり、広島カーブについて熱い思いを語られた居酒屋に私のスマホを忘れてしまって届けてもらったり、少し笑えるような楽しい思い出が多くあります。この研究会は素敵だな、これからも全国大会に参加したいと思いました。

その後、全国大会には、業務の都合で毎回というわけにはいきませんでした。何度か参加しました。印象に残っているのは、神戸大会でしょうか。初めて須磨に行き、海が見えるホテルで、分科会や交流会に参加して、楽しかったです。全国大会に参加を重ねると顔見知りの会員も増えて、「久しぶり」と声をかけてもらえるようになりました。

仕事をしていると、兼務の担当業務が忙しく、自分が本当に図書館に携わる人間なのか、分からなくなる時があります。みなさんも多忙な業務や部署移動で、同じような思いをしたことがあるのではないのでしょうか。そんな中で、大図研は、自分が図書館員であることを思い出させてくれる場所です。

全国大会での3日間は、ひたすら図書館の事を考え、語り、勉強することができる大切な時間です。みなさんの熱意にふれると「私にもまだ何か出来ることはあるのではないかと、頑張ってみよう」という気持ちになります。私は、図書館が好きで、図書館員になりました。そして、図書館が好きでたまらない人たちが大図研にいます。もちろん日々の業

務は大変で、仕事は増える一方で、体も限界だなと思うことも多いし、できることも予算も限られています。それでも、全国大会で出会ったみなさんが、全国のどこかの図書館や関係機関でそれぞれ頑張っているのだなと思うと、心強い気持ちになるのです。

現在、私は所属している東海地域グループの全国委員をしています。運営への参加は初体験です。大学の担当業務に忙殺されて、スムーズにこなせているとは言い難いのですが、他の運営委員のみなさんに優しくサポートしてもらっています。それぞれ抱えている仕事の量も大変さも違っているけれども、図書館好きが集まる大図研は関われば関わるほど、楽しい！そう思っています。それが私の「大図研のすゝめ」です。

(なかがわ・えりこ /

東海地域グループ・金沢学院大学)

大学図書館研究会とわたくし

山下 大輔

1. 大学を離れて

私事ですが、私、この10月12日を持って大学を退職し、図書館に関係する民間企業(EBSCO Information Services)へ転職しました。この決意をするに至る経緯の中では様々な思いがありましたが、打診を受けてから決意するまで、概ね2ヶ月程の出来事だったと記憶しています。図書館情報大学を2001年に卒業後、約6年公共図書館(太宰府市民図書館)へ勤務し、その後、大学図書館(西南学院大学)へ転職し15年勤務しました。図書館での勤務が、ちょうど20年を超えたところで、一つの区切りをつけることが出来たと思っています。

転職を決意した理由は、いくつかありますが、誤解を恐れずに主な思いを並べてみます。

- ・現在44歳となり、退職まで約20年と考えると、もう一度新しいことにチャレンジできる最後のタイミングだと感じたこと。
- ・大学図書館に対して自分の能力を発揮する可能性に限界を感じたこと。また、地方私立大学の組織全体の限界を感じていたこと。
- ・多くの図書館に対してアプローチできる新しいチャレンジに魅力を感じたこと。
- ・これまでの経験、知識、スキルを活かすことが出来ると感じたこと。
- ・更に必要となる（求められる）経験、知識、スキルが明確に示されていたこと。
- ・世界各国の状況を知ることが出来ること。
- ・図書館司書の可能性を広げることに寄与しなかったこと。
- ・転職に伴うハードルが低かったこと。

新しい立場での、これからの自分の評価がどうなるか分かりませんが、新しいチャレンジの場をいただけたことに感謝し、異なる視点から大学図書館業界に関わることに出来る幸せを堪能したいと思っています。

2. 大図研のこと

転職するにあたり、いくつか気がかりもあったのですが、外部要素として大きな問題の一つが大図研でした。転職を決意した当時、九州地域グループの代表を務めておりました。しかしながら、大学図書館を主な取引先とする企業への転職にあたっては、「代表」という立場のままでは、これまで大事にしてきた組織体制や、コンプライアンス的な問題としても、私が代表に留まることは、好ましくないものと判断しました。この点については、現会員の皆様にはご迷惑をおかけすることになりました。

九州地域グループには、現在30名を超える会員が所属していますが、活発に活動するメンバーは減少してきており、固定的なメンバーでの運営が続いています。しかし、活動

を整理していきながらも、まだまだ、知恵を出し合い、情報を交換する場としての九州地域グループには需要があり、必要性もある、というのが、活動を支えているメンバーの現状認識です。私も、当グループで多くの出会いがあり、貴重な学びがあったと実感しています。

代表職はひとまず、現全国委員の柿原さんに兼務いただくことになりました。地域グループの会員の皆様の理解を得ることが出来たこと、次を担ってくださる方がいらっしやっただけが幸いし、無事に活動を続けていくことが出来そうです。

3. 図書館業界のこと

自分自身のキャリアのこともありますが、前述のとおり、私立大学を取り巻く状況の厳しさを感じたことが、立場を変更する気持ちになった一因です。それは、特段、「図書館」という文脈に限ったことではないと思います。組織や業界全体に関する根深い問題に到達し、限界を感じました。このままでは、崩壊する組織を整理し、見切りをつけることに向き合うことになりそうでした。私は、その必要性を切に感じておりましたが、実行に移すことはできませんでした。

今後、仮に急速な動きがあった場合、最後まで抵抗する勢力になる可能性があるのが、実情に沿った能力形成やキャリア形成が出来ている方々です。不幸な場面も想像できますが、業界全体を俯瞰して考えていかなければならないと感じています。

4. さいごに

大図研は、私にとっては、これまで大学職員としてのアイデンティティを構築していく上での大事なサードプレイスでありました。立場は変わりましたが、今後も同様であることを期待しています。新しい未来を作っていくことを考えましょう。

(やました・だいすけ／九州地域グループ・
EBSCO Information Services)

大図研とわたくし

若狭 あや

京都地域グループの若狭と申します。大図研とわたくし、というテーマで書いてくれませんか？とご連絡いただきまして、ちょうどいい機会ですので、入会した時から今までの思い返させていただくことにしました。

私は第46回全国大会(札幌)に参加した後、大図研に入会しました。当時、大学生であった私は友人2人と共に3人で北海道大学まで向かいまして、分科会とシンポジウムに参加しました。その時のシンポジウムは、「学術雑誌問題の今後を考える：電子ドキュメントデリバリーサービスとペイ・パー・ビュー」というタイトルで、文系の学部生であった私にはあまりこれらの問題に馴染みがなかったのですが、そのとき会場におられた方に、この問題はとても重要な問題で、今後もホットなテーマだよ、と教えてもらったこと、そして、その時プロジェクターで映されていたElsevier社の繁った木の下に老人がいるロゴマークが印象的で今でも覚えています。

その後、しばらくしてから大学図書館で働くことになるのですが、最初の2年程は特に電子ジャーナル等の問題にはあまり現実味がなく、深く考えないまま過ごしており、しっかりと電子ジャーナル等について考えることになったのは、電子リソース掛という掛に異動してからでした。電子リソース掛は名前の示す通り、色々な電子リソースの管理を行う掛で、電子ブックをOPACに投入したり、電子ジャーナルを電子情報資源管理システムに登録したり、データベースの契約手続きをしたり、それまで閲覧担当をしていた私にとっては新しいことばかりで、日々が目まぐ

るしく消えていきました。

その中、海外研修に行く機会があり、スウェーデンとフィンランドにオープンアクセスとオープンサイエンスについて調査に行きました。ちょうどスウェーデンがElsevier社と3年間のRead & Publish契約を結んだというニュースの直後に訪問していたこともあり、どうやってこのようにオープンアクセス等を推進できたのか、とスウェーデンの各機関で尋ねました。一番印象的だったのが、ウプサラ大学の日本人のライブラリアンの方から、「スウェーデンでこれだけオープンアクセス等について進み出したのはここ数年の話で、進み出したら一気だったから、大丈夫。日本でも進み出したらすぐですよ」と言われたことでした。その時は本当に？としか思えなかったのですが、その3年後の今、実際に少しずつではあるものの、転換契約等が進んでいくのを見て、感じるものがあります。

その後、色々経て、ジャーナル問題検討部会の運営のお手伝いをしたり、また電子リソース掛に異動したりと、ここ3、4年は電子リソースに関することで頭がいっぱいですが、これからも引き続き、頭を悩ませていくことになるのだろうか、と思います。

書いていく内に、私と大図研というより、私とElsevier社の思い出のようになってしまいました。2015年に勇気を出して、北海道大会に参加したこと、その後、大学図書館研究会に入会したことで、今の私があると思っています。最後になりましたが、北海道大会の際、台風の中小樽から舞鶴にフェリーで帰ることを心配してくれた方、北海道のお菓子を送ってくださった方、大会の後にご飯をご馳走してくださった方、そして、たくさんのフォローおよび心遣いをいただいた京都地域グループの皆様のやさしさがあったからこそ、あの時入会に踏み切れたのだと思います。改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

大学の図書館 第42巻第1号 (No.590) 2023年1月25日 (毎月25日発行) ISSN : 0286-6854
編集・発行 : 大学図書館研究会 年間予約購読料 : 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付

Fax : (044) 989-2250 E-mail : shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00140-6-482205 大学図書館研究会出版部

三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座 : 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付

E-mail : dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00190-2-79769 大学図書館研究会

近年、中々対面で集まることが難しいです お願いいたします。
が、オンラインという手段もあることで、
色々と皆様と交流を深めていければと思って (わかさ・あや／
おります。今後とも引き続きどうぞよろしく 京都地域グループ・京都大学附属図書館)

『大学図書館研究会誌』の発行と投稿受付のお知らせ

次号発行のお知らせ

次号、第48号の『大学図書館研究会誌』の発行は、2023年8月の予定です。
第48号から、冊子版の発行を終了し、電子版刊行後、即時オープンアクセスとなります。

投稿のお知らせとお願い

- ・『大学図書館研究会誌』は、現在、査読体制の整備中のため、「論文」の投稿の受付を停止しております。
- ・その他の、「書評 (10,000字以内)」、「報告 (15,000字以内)」、「資料紹介 (1,600字以内)」の投稿の受付は引き続き行っております。
- ・前述の投稿のメ切は、2023年4月30日(日)です。

会員の皆様の報告、発表の場として、ご投稿をお待ちしております!

【お問合せ・投稿先】

大学図書館研究会会誌編集委員会

E-mail: dtk-ks@daitoken.com